

農業の外部性と「段階的農村プロダクト・イノベーション仮説」

千葉大学大学院園芸学研究科 教授 大江 靖雄

農業の外部性は、人を魅了してやまない。農業の外部性の魅力に取りつかれ、研究テーマとしてきた筆者の感想である。農業の外部性の問題は、多面的機能や最近ではエコシステムサービスなどとの関連で注目され、これらの点は農村政策のテーマとして位置づけられてきてもいる。しかし、外部性は重要なテーマではあるものの、生産経済学を主軸とする農業経済学の伝統的なメイン・ストリームの研究テーマとはいえない。この点で、筆者は長年やや斜め横から農業経済学を眺めながら研究を行ってきた一人である。しかし、それにより、真正面からはみえないことがみえることもあると考えており、その点が外部性の研究の面白さということができる。

外部性は、それ自体は結合生産として生じるもので、経済学的な政策対応を取らなければ市場外存在として留まるのみである。筆者のもう一つのこだわりは、外部性の内部化という問題である。内部化の問題に着目することで、外部性の問題は初めて政策とのつながりやビジネス化との関わりを持つことになる。この意味で、内部化問題は実社会との接点であり、応用科学である農業経済学の真価が問われるのも、この内部化の問題ということができる。つまり、外部性を研究することの面白さは、この内部化の問題を解き明かすことにあると考えている。

そこで、次に外部性の内部化の問題を、長年の研究テーマである農村ツーリズムを例に考察してみたい。筆者が、農村ツーリズムに着目するのは、農村の資源を活用した新たな農村のサービスなどのビジネス成立の条件を明らかにしたいと考えるからである。経済学的に言えば、農業・農村の外部性を農村ツーリズムにより内部化して、いかに所得化を図るかということである。しかし、それは一筋縄ではない。特に、農村部では、人も金も情報も不足しており、新たな展開を図るための障害はあまりにも多い。さらに、この分野は、新たな領域ゆえに、経済学的フレームワークがほとんどないため、実証分析を行う際には、理論的なフレームワークの構築

をしながら進める必要もある。しかし、それは言うは易し、行い難しである。この分野の研究が、事例分析にやや終始しがちであることも、この点に原因の一つがあると考ええる。

そこで、こうした農村の実態を踏まえて、提起したいのが「段階的農村プロダクト・イノベーション仮説」である。例えば、農業体験サービスなど新たな活動を始めようとする場合、活動の当初は、社会的な認知も低く需要も少ないため、提供するサービスに対してほとんど料金を設定することはできず、ボランティアで無償の活動から始まる。その間、消費者からのフィードバックが生まれサービス提供者の自信や満足、やりがいが高まる。やがて活動の広がりニーズの拡大で、実費程度の回収ができる「もうからないが損はしない」段階となる。さらに、活動が発展すると、外部ネットワークの拡大で外部の資源の活用による学習と支援からサービスの質が高度化して需要も拡大し、外部性をすべて回収することができるようになる。直線的ではなく、段階的に外部性の内部化を図ることで、農村プロダクト・イノベーションにつなげようとする考え方である。この過程は、経済学的にも整合的である。初期段階は私的均衡、次いで平均費用均衡、そして社会的均衡へと到達して、外部性の内部化が達成され、内部化が進むことで、活動水準も拡大する。なぜなら、正の外部性の場合には、上から私的限界費用、平均費用、そして社会的費用曲線の順に並ぶことになるからである。この仮説は、内部化という観点から未解明な農業と農村の社会的役割を解明するための有効なフレームワークとして、外部性を伴う新たな活動に対する実証分析の根拠となると考えている。今後、理論的精緻化と実証分析の蓄積をさらに図り、この分野での国際的貢献を果たしたい。

